

【平成17年度専修学校を活用した若者の自立・挑戦支援事業】

事業名	掘り起こせ地域ブランド、育て観光ヒューマンスキル・IT活用人材育成プログラムの開発		
学校法人名	コア学園		
学校名	唐津コンピュータ専門学校		
代表者	理事長:門田章	担当者・連絡先	校長:木原厚二 e-mail: kihara@core.ac.jp TEL: 0955-77-1771 / FAX: 0955-77-1774

〔事業の概要〕

唐津は、大陸(唐・朝鮮半島)への港(津)として古くより交流の拠点として大きく関わってきた地域である。依って元寇襲来、豊臣秀吉による名護屋城築城、朝鮮出兵、朝鮮通信使等々唐津は歴史の1ページを飾った出来事が数多く存在しているエリアであり、唐津焼はじめ大陸文化を窓口として最初に受け入れた重要な拠点でもある。また唐津市一帯は日本三大松原の一つと言われる「虹の松原」、唐津湾を一望できる「鏡山」、美しい海の洞窟「七つ釜」等長い時間と自然が造り上げた見事な景観を有する西九州屈指の観光地である。

そして今唐津市は1市2村6町により合併し人口約13万人の中核都市として新しく生まれ変わったのを機に、唐津の素晴らしい自然、貴重な歴史・文化遺産などをより広く知らしめ、一人でも多くの人達に来て頂き併せて地域の活性化を図りたいと願い新たな観光施策を迫られていた。

また本校も教育者の立場からこれからの唐津の観光を考える時、今一番必要な事は牽引していく人材、つまり「郷土唐津を愛する情熱有る若者」を観光のスペシャリストとして育成するの必要を感じていた。そこで本校と企業(商工会・商工会議所、観光協会、ホテル・旅館、旅行代理店等)と自治体が連携し、観光・特産品等のブランドの掘り起こしから、観光サービス業のビジネス/ヒューマンスキル、ホスピタリティマインド、IT利活用技能を修得する人材育成のプログラムを開発した。さらに、企業実習を含めた実証講座を実施し、地域の人材育成の有効性を実証し、研究成果を弊校の事業への展開と他地域への振興を図った。本事業を大別すると次のように分けられる。

(1) ニーズ調査〔データは全て合併後の新唐津市と玄海町の合算にて記載〕

1. 唐津の観光現状
2. 交通体系・観光客動向
3. 諸施設利用状況
4. 国内旅行事情

最初に観光客は今どのような旅行を求めているのか実態調査を行なった。その中で国内の旅行事情を調べてみると、その形態が団体から個人へシフトしている事。また既製の旅行は今や過去のものとなりつつあり、個々の希望により企画する、つまりオーダーメイドの旅行が注目されてきているというのが認められる。それは『受身型』から『体験型』という《心を癒せる旅》《心に残る旅》《心通う旅》への変革の時代になったと言えるだろう。ちなみに体験型観光とは地域の資源を一方的に見せるのではなく、旅行者の五感を通じて、より実感させる「観光の魅せ方」が重要なポイントではないかと考えられる。最近特に体験型観光への志向が増加しているマーケットが「修学旅行・教育旅行」である。寺社仏閣や史跡名勝を子供達一団で転々と廻る旅行から地域の歴史や文化・産業を子供達の眼や足で触れさせようとする旅行傾向が顕著になってきているようだ。

次に佐賀県並びに唐津地区の観光客の推移をデータに基づいて分析してみた。平成7年から平成16年までの資料からみて、少しづつではあるが、増加してきている。これは交通網の整備等輸送手段の確立もさる事ながら、「グリーンツーリズム」或いは「ブルーツーリズム」といった都会では体験できない自然志向の旅が注目されてきたからではないかと考えられる。又隣接して100万都市福岡を擁しているのに拘わらず宿泊客が増えないのも、早朝から移動シタ方には帰宅するといった家族及び健康志向も手伝っての事と伺える。この事実を踏まえ我々は、唐津の観光は「自然回帰」つまり「自然と人間の調和」を基本姿勢として取り組むべきであると結論づけた。

唐津という地域は正にこの『体験型』観光に最適であると考え、今回は『体験型』という手法に《心に響く旅》を基にして唐津の観光を考えてみる事にした。

佐賀県全体の観光客の推移(単位:千人)

年 度	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
人 数	29,005	33,470	30,191	31,582	31,037	30,169	30,293	31,660	32,005	31,412

観光客の推移(単位:千人)										
年 度	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
人 数	8,887	9,664	9,168	9,273	9,371	9,171	9,137	9,658	9,516	9,150

観光客の利用交通機関並びに宿泊状況(単位:千人)						
年 度	観 光 客 数	鉄 道	バ ス	自家用車	タクシー	宿泊客数(率)
平成14年	9,658	244.8	1,894.1	7,334.6	69.6	594.9 (6%)
15年	9,516	238.0	1,885.4	7,320.5	71.7	563.8 (5%)
16年	9,150	646.1	1,298.4	6,967.3	66.8	540.7 (6%)

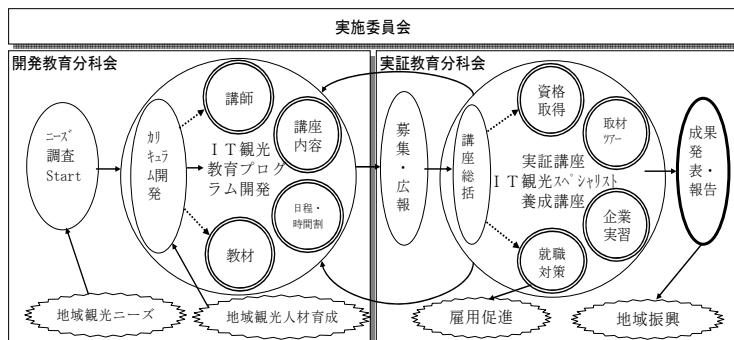
発地別観光客(単位:千人)									
年 度	観 光 客 数	県 内	九州各県		九州以外				
				福 岡		四 国	中 国	近 畿	そ の 他
平成14年	9,658	3,173.9	5,354.5	3,808.0	1,129.5	171.8	330.7	226.9	386.1
15年	9,516	3,238.5	5,234.5	3,770.3	1,043.6	185.8	322.0	210.6	338.7
16年	9,150	2,927.8	4,879.3	3,584.3	1,342.5	137.0	301.0	381.0	523.5

観光消費額(単位:千円)								
年 度	年間消費額	前年比	宿泊費	飲食費	土産品費	交通費	入場料等	一人当たり消費額
平成14年	33,278	98%	5,451	11,343	9,012	5,383	1,753	8,159円
15年	32,613	98%	5,009	11,515	8,647	5,239	1,878	8,124円
16年	30,802	95%	4,819	10,880	8,006	4,952	1,810	8,043円

【参考資料】 体験型観光の組織化・事業化～体験型観光への流れ～
 ～体験型観光は地域の観光振興の切り札となるか～
 ～体験観光が継続・定着する為の組織・体制～
 (株)ユニコム主席研究員:中根裕氏著「月刊レジャー産業」2004年6月号より

(2)本校(専修学校)と行政・商工会議所・観光協会等観光関連団体・企業・有識者が連携し、IT観光のスペシャリストを養成すべくカリキュラム・IT観光教育プログラムの開発

実施委員会・開発教育分科会・実証教育分科会を開催し、観光事業におけるIT化人材育成の為のカリキュラムを作成し、IT観光教育プログラムを作成した。そのカリキュラムを基にして実証講座<IT観光スペシャリスト養成講座>を実施し、その結果を実施委員会・開発教育分科会・実証教育分科会にフィードバックし更に行政・観光関連団体・企業・有識者の助言を頂きIT化人材教育の為のカリキュラム・教育プログラムの評価と改善を行なった。



【図】IT観光教育プログラム
開発イメージ図

(3) 実証講座「IT観光スペシャリスト養成講座」の実施

本講座(IT観光スペシャリスト養成講座)はIT技術取得をベースに、真の観光スペシャリストを養成すべく、協調性・人間性に溢れる温かい心を持って取り組める人材育成を目指し、基本に《もてなしの心》《思いやりの心》《故郷を愛する心》を掲げ5カ月間現地調査・実務研修に取り組んだ。

(4) 地域振興

(報道)

10/4本講座の入校式においてメジャーマスコミ等(NHK、サガテレビ、唐津ケーブルテレビ(ぴーぷる放送)の放映と佐賀新聞、毎日新聞、唐津新聞の掲載)に取り上げられ、注目を集めた。また、2/28成果発表会ではぴーぷる放送の放映、同日の講座の修了式でも佐賀新聞、唐津新聞に掲載された。

(成果報告会)

成果発表・報告会は予定を含め下記の通りである。

	期 日	曜	会 合 名	出席者数	発 表 者	会 場
①	2月15日	水	佐賀県専修学校各種学校連合会研修会	約20名	事務局	ホテルニューオータニ佐賀
②	2月28日	火	本校主催卒業成果発表会	約50名	事務局・受講生	唐津商工会館大ホール
③	3月11日	土	本校主催島根地区業務報告会	約20名	事務局	出雲コンピュータ専門学校
④	4月上旬		唐津市議会地域振興活性化特別委員会	約30名	事務局・受講生	唐津市庁舎(予定)

[成果]

(1) 資格取得

実証講座にマイルストーンとして資格取得試験を実施した。そのことによって、受講者10名は意欲的に資格取得にチャレンジし、全員が有資格者となった。このことで、受講生全員がスキルアップの証となり、再就職に弾みをつけた。

	資 格	合格者数
①	日商ビジネスコンピューティング検定試験3級	5名
②	文部科学省認定ビジネス能力検定(財団法人専修学校教育振興会)2級	3名
③	文部科学省認定ビジネス能力検定(財団法人専修学校教育振興会)3級	2名
④	ホスピタリティ検定試験(日本ホスピタリティ協会)3級	9名
⑤	日商日本語文書処理技能検定3級	5名
⑥	Webクリエイター能力認定試験(サーティファイ)初級	9名

(2) 進路(就職・進学)

受講生10名中、就職希望7名、進学希望3名。就職希望者7名中、内定4名、就職活動中3名。進学希望者3名中、専門学校2名内定、中国(北京)の工業大学留学中1名。卒業後17日で就職率57%となり、各自順調に自分の道を歩みだした。

(3) 産官学の連携から生まれた人材育成

今回の講座の目的は、即戦力たる「観光スペシャリスト」の養成であったが、受講者10名共熱心に取り組み、初期の目的が果たされたものと考えられる。

10月4日から5カ月間に亘り朝9時から夕方4時まで週5日間、総授業時間数600時間強。一人の落ちこぼれも出さず修了式を迎えられた事は、感無量とするところである。

まずIT授業。約300時間を費やしワード・エクセルといった基礎から、ホームページ・チラシポスター作成からパワーポイントを使ってのプレゼンテーションまで全員自由に操れるまでに成長した。観光関連、特にホスピタリティの授業に関しては、地元2大ホテルにお願いしテーブルマナーからレストランサービス・ハウスキーピング等ホテル・レストラン・宴会部門並びに宿泊部門に至るまで2週間という短期間の実習であったが、接客(ホスピタリティ)の原点を体で感じ取る事ができたようだ。

次に地元スポットの調査。[名所][旧跡][寺社仏閣][景勝地]並びに[歴史][自然][文化][まつり][慣習]等調査研究し地元の事を熟知すること。そして今回の受講者を軸に「郷土を愛し」「心から唐津を自慢できる人」を一人でも多く育てる事。唐津市民一人一人が温かいホスピタリティでお迎えする事が出来る土壌作りをしていく事が大切であると考えているが、今回の受講者はその牽引役に立派に育ったと認識した。

(4) 観光について

体験型観光により地域を活性化したい、観光客や滞留人口を増やしたいという地域側の期待は、全国殆どの地方自治体が抱えていると思うが、それは従来からの狭い意味での観光行政や観光事業者だけでなく、農林水産業である第一次産業をはじめ地域の伝統文化の継承や、高齢者の生き甲斐対策等といった地域社会全体の活力を維持する上からも注目される。「地域の農業を元気にしたい」「伝統技術を継承したい」そうした想いと行動が旅行者から見た時に本物の地域体験と映るのかもしれない。

そして観光関係事業者だけでなく、地域の第一次産業や文化を継承する幅広い資源や人材が連携して体験型観光を推進させる体制と仕組みづくりこそが最も重要と考えられる。

そしてそれらの地域らしさを旅行者に伝えるポイントは立派な施設でもなければ、最新機器でもなく、正に地域の《ひと》であると言える。農業にしろ、漁業にしろ、地域で生活し、代々から伝わる産業や文化を継承し、それを地域の言葉ややり方で語り、体験させてくれる人を通じてこそ、地域の生き様としての体験が伝わるのである。体験観光に成功している地域への旅行者にはリピーターが多いという。概ねそれらのリピーターの評価では、体験自体素晴らしいこともあるが、「またあのおばちゃんに会いたい」といった体験を伝えてくれる地域の人に惹かれる事が多いと聞く。やはり鍵は《ひと》なのである。

体験型観光では資源やメニューの内容もさることながら、それらを支える地域の人や組織、そして一つの事業の仕組みをきちんと捉える事が体験型観光を一時の流行すたりでなく、安定して継続させる上で重要と認識する。それには郷土愛に培われた真のホスピタリティであり、自然を愛し、隣人を愛する温かく親切な心で観光客を迎える事の出来る人材の育成であると確信する。

(最後に)

今回の事業で、若き情熱に燃えた郷土愛溢れる10名のリーダーを育てる事が出来た。

これからは彼等を軸に、この輪を拡げて行く事が重要なのではないかと感じている。そして彼等は最終日の2月28日、修了式を前に5カ月間で学んだ集大成として〈成果発表会〉を行なったが、彼等は取得したIT技術と調査研究してきた課題で40名を越す聴衆の前で堂々と唐津観光に対する持論を展開した。

ある者は歴史的見地から。ある者は伝説や文化の見地から自分なりの推薦スポットを紹介。またある者は美しい自然とエコツーリズムを課題にして発表した。

出席された唐津市観光課の職員をはじめ、唐津商工会議所、唐津観光協会、有識者、歴史家、学芸員、観光関連企業など多くの方々から絶賛の声を頂戴し、現所在地元テレビ局並びに市議会の委員会からも講演要請が来ている。

唐津の輝かしい伝統と文化。そして豊かな自然を頑なに守り続けてきた先人への感謝を込め、また今回の事業を通じ素晴らしいリーダーとして育てた10名に更なる期待を込め報告を終わるが、今後は平成18年4月から本校の総合情報科IT観光コースを新設し、これまでの経験と人的ネットワークを生かし、より多くの若人を育てたい。また、他地域においても本人材育成プログラムが採用され、地域振興の一助になれば、この上ない幸いである。